

## まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室  
助教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

### 1

平成 12 年度の現代国際社会ゼミナール I (榎田ゼミ: 4 年次生 4 名、3 年次生 2 名) では、従来にひきつづきエスノメソドロジーを中心的に扱った。研究発表部分では、各学生に分析データそのものを提示しながら議論するよう要請し、討論における質疑内容が無駄にならないよう配慮した。

なお、卒論生の濱松真理子氏は、テーマが非エスノメソドロジー的なもの(「過疎地研究」)だったため、学部でのゼミに加え、大学院の授業(人間自然環境研究科人間環境専攻の共通科目「四国地域社会論」)にオブザーバーとしてでてもらい、研究の検討を行った。

また、阿部智恵子氏および梯恭一氏の両氏は、それぞれ「榎田研究室所属の大学院生」、「ゼミ論集の応援執筆者」として今回原稿を書いてもらった。「現代国際社会ゼミナール I」に通年でオブザーバー参加していた本学大学院生の久喜はるみ氏には、授業中に論文の改善につながる多くのコメントをもらった。

先輩-後輩の関係に基づいて授業準備や調査のノウハウが伝達されていたため、予想以上に順調なゼミ運営を今年はすることができた。各人の「調査」テーマが早めに設定できたため、ゼミ時間外の「調査」活動も比較的スムーズに行われた(多くの調査は前期中に撮影等のデータ収集を終えることができた)。

扱ったテキストは以下のとおりである。

- 1) 教科書として、西阪仰 1997『相互行為分析という視点』金子書房、上野直樹 1999『仕事の中での学習 — 状況論的アプローチ —』東京大学出版会、および、サーサスほか 1989『日常性の解剖学 — 知と会話 —』マルジュ社。
- 2) 副読本として、山崎敬一・西阪仰編 1997『語る身体・見る身体』ハーベスト社および、好井・山田編 1999『会話分析への招待』世界思想社。

本ゼミ論集は、そのタイトルを『現代社会の探究』とし、上記のテキストを読みつつ各人が調査・研究したことを書いてもらっている。

なお、掲載順に関しては、提出された原稿を内容にしたがって以下の 2 部に分け、関連した論文がまとまるよう編集した(論文 8 篇はすべて単著)。

#### 第 1 部 制度に生きる

ビデオ分析を中心とした論文 6 本

#### 第 2 部 地域に生きる

非エスノメソドロジー的な論文 2 本

### 2

今年の 4 年次生も、榎田の誘導にしたがって全員が調査(ビデオ分析、参与観察、長時間インタビュー)の成果を提出した。例年スペースが不足してまとみにくいという苦情を受けるので、今年は、執筆量の範囲を A 4 で 8 枚から 20 枚とし、データの部分も十分提示できるようにしたが、そのことが逆に、記述内容の絞り込み不足を招いたようだ。この点は反省している。

3 年次生には、この演習とは別に調査実習(樋口直人教官担当)の受講が義務づけられており、その報告書の執筆という重い負担も存在する。それにも関わらず、両氏とも意欲的題材による調査を敢行し、画期的な論文(の試作品)を執筆した。この意欲は高く買い

たい。たしかに、データからくみ取れることの一部しか原稿化できていないという欠点はあるものの、そこに示された社会学的センスは優れたものであると評価できよう。

以下いくつかの作品について、簡単に編者としてのコメントを付し、読書案内としたい。

(1) 石村論文(「選挙討論及び開票速報の秩序分析」)について。

TV放映された「選挙討論」および「開票速報」を分析した好著である。実際の相互行為場面の撮影データではない資料を用いながら、ぎりぎりのところで相互行為分析的な主張が可能なのは何か、を追求して書いている点が優れている。「開票速報」においては、静止画の中に見て取れる「政党間秩序」が、じつは動画としての「選挙討論(政党の幹事長クラスによる討論会)」においても、“シークエンスの秩序”として存在していることを証(あか)しているのは、画期的な業績ではないだろうか。政治学の業績としても読めると思う。

(2) 幸田論文(「特別養護老人ホームにおける高齢者とスタッフの相互行為分析」)について。

「ちょっと」というなんでもない言葉遣いが、じつは老人ホームにおける健康診断場面において、①そこでの看護婦による身体接触を免罪するとともに、②身体接触をまさに健康診断とする力を持つ、という相互行為的分析には、インパクトがある。理論的達成(例:異種の小課題のモザイクとして大課題が達成されていること)と、具体的場面の分析(老人ホームがどのようなテクニックを用いて造り上げられているのか)のいずれに重心があるのか分かりにくい点が難点だが、精密な分析は研究史に残っていく質をもっており、基本資料として参照され続けていくだけの価値があるといえよう。

(3) 小濱論文(「美容院における相互行為分析」)について。

美容院における「鏡」を用いた相互行為がいったいどのような相互行為になっているのか、ということ、水川のテレビゲーム研究と対比しながら、示している。美容院の相互行為の最初に「視界の重ね合わせ相互確認関係」が成立し、それが終了して、業務が終わるというストーリーには説得力があるといえよう。

(4) 他の諸論文について

今年も本数が多く、他の作品には個別に言及することができない。しかし、どれもデータからいえることを、それなりにオリジナルな仮説と結びつけて主張しており、読みがいがある。エスノメソドロジー系の研究は、生活者が持っているセンスを生かせる部分が多いからか、1年間の訓練でかなりの水準が達成できるようだ。今年の結果を省みてみて、来年以降もこういう形式での演習を続けていってよい、という自信をもった。

なお、論文作成に用いたデータ(ビデオテープや音声テープ)については、基本的に榎田研究室に保管されている。データのうち貴重なもの(たとえば、坂井の車イスバスケットボールに関する撮影データ)は、機会をみてCD-ROM化(あるいはホームページ掲載)を試みる予定である。研究者の2次利用についても検討しているので、関心のある向きは問い合わせて欲しい[榎田の上記 e-mail アドレスへどうぞ]。

=謝辞=

今年もまた多くのかたの助力をえて研究を進めることができた。とりわけ、国際基督教大学の岡田光弘先生と明治学院大学の中村和生先生には、再三にわたり来徳して頂き、その度ごとにゼミの長時間討論に参加してもらい、たくさんの助言を賜った。ここに記して感謝する。